
ひぐらし異聞録 ～螺旋の絆～

ポストマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらし異聞録 〈螺旋の絆〉

【Nコード】

N4683T

【作者名】

ポストマン

【あらすじ】

すべてを失った少年は、運命との戦いを決意する。死と戦う少年は、真実を求め願う。決意と願いは螺旋となり、一つの絆を紡ぎ出す。絆が呼び起こす道の果て、それは希望か絶望か…

プロローグ 慟哭は響き渡る（前書き）

新人のポストマンと申します。

あまり上手な文章ではありませんが、皆さんに読んでいただけたら嬉しいです。

プロローグ 慟哭は響き渡る

その日、俺達の世界は暗転した。

すべては奪われ、踏みにじられ、残骸だけが残った。

俺は腕の中で嘆き悲しむ彼女を抱きしめながら、呟く。

「絶対、認めねえ」

それは、反逆の誓い。

「こんな運命、絶対覆してやる！」

残酷な運命を押し付けるナニモノカへの、

それは宣戦布告だった。

とある小部屋にて、みつつの人影があった。

「では、協力して頂けるのですね？」

「はい。ただし選択はお客様本人になさっていただきます」

ひとつは、鼻の長い老人。

「その選択が如何なるものであったとしても、私どもはその選択を尊重いたします」

ひとつは、青い服の女性。

「それで結構です。では、失礼致します」

そしてひとつは、長い黒髪の和装の女性だった。

「やはり、あのお客様は只者ではありませんな。まさか時の彼方からの使者がおいでになるとは」

黒髪の女性が立ち去ると、長鼻の老人は興味深そうな呟きを漏らした。

プロローグ 慟哭は響き渡る（後書き）

文章が短いです。

これからはもっと長い文章が書けるようにしたいです。

第一話 残されていた遺産

年が明けてしばらくした頃。

寮の自室で手帳を見ている時に、急な呼び出しを受けた。

「どうやら桐条先輩が何かを発見したらしい。」

「なあ海斗。何だろな、見せたい物って」

隣の順平が聞いてくる。

「多分シャドウに関係ある物だろうな。それも、かなり重要な」

「というか、今の状態でそれ関係以外の理由が思いつかない。」

「でも何で今頃なんだろうな？」

「いや、俺っちに聞かれても」

「そりゃそうだ。」

作戦室には、他の全員が揃っていた。

「これで全員揃ったな」

桐条先輩が全員揃った事を確認すると、ひとつの箱を出してきた。

「それは何だ、美鶴」

真田先輩が、その場の全員の内心を代弁する。

「これは先日、幾月の部屋から発見されたものだ」

「え？あいつのですか？」

久しぶりに幾月の名を聞いたせいも、ゆかりが顔をしかめる。

桐条先輩が箱を開けると、そこには一枚の古びた鏡があった。

「以前、皆に『時を操る神器』の話をしたのを覚えているか？」

「確か、センパイの爺さんが作るうとしたアレっすか？」

「そうだ」

「それって確か影時間が発生した原因の話のこと、でしたよね？」

「ああ」

順平や天田君の話に、口元を歪めながら先輩は答える。

「でも、その話とこの鏡がどう繋がるんですか？」

風花の疑問に、視線が先輩に集まる。

「その神器の核となる物が、その鏡だ」

意外な答えに、場が静かになる。

桐条先輩によると、この鏡は元々とある村に奉られていた神鏡らしい。

村自体は災害によって滅びていたが、鏡に関する文書は残っていたこと。

「それで、祖父はこの鏡に何らかの力があることを知ったらしい」

「この鏡にですか？」

「幾月の手記にはそのように書かれていた。奴はこれが『王になる為の証』だと考えていたようだが……」

証拠になるものは、その手記とこの鏡だけのようだ。

「なら、私が調べて見ます」

「やってくれるか、山岸」

風花はそう言うと、召喚器で『ルキア』を呼び出す。

『確かに、何か強い力が感じられますね』

「そうか、他には何か判る事は無いか？」

『後は、どこかの風景が見えます。どこかの田舎のような景色に「古手神社」と書かれている鳥居が……』

『古手』と聞いたとき、俺の体は僅かに反応した。

だが、それ以上に反応した男がいた。

「…あのさ山岸、今、『古手神社』つつた？」

『言いましたけど、それが？』

順平の顔がどんどん青くなっていくのが見て取れた。

「伊織、お前何か知っているのか？」

「…実はオレ、前に怪談話集めてたことがあったじゃないっすか」

「順平、あんたまたそんな」

「いいから聞けって。んで、その中に『雛見沢村』の怪談があったんすよ」

僅かに、順平が震えだす。

「何でも、『一夜にして滅んだ村』とか、『地獄の鬼の未裔達の村』
だったらしいつす。それに、『数人の調査隊が行方不明になった』
とか、『祟りが元村人を殺人鬼に変えている』とか…」
「順平、もしかしてさっきの『古手神社』って…」
ゆかりも、真つ青な顔をして聞いてくる。
「その神社。んな所のモン勝手に持ち出したら…」
誰もが、鏡を見つめて沈黙する。

「心配は要らない」

俺の一言で、みんなの視線が俺の方に向けられる。

だが、言わないといけない。

あの村の真実を求めた両親の、

「心配要らねえって、実際」

「大丈夫だ。だって…」

前原圭一と園崎魅音の為に。

「俺の両親の故郷だから」

第二話 追い求める者達の軌跡

「海斗、両親の故郷って…」

「言ったとおりだ。俺の両親はあの村の出身だ」

「本当なの、海斗君」

俺が頷くと、また沈黙が降りた。

「俺の父親は前原圭一、母親は前原魅音。旧姓は園崎だ」

「園崎って、まさか」

順平の顔が、驚愕で歪む。

「伊織、園崎ってどういう意味だ？」

「真田先輩、園崎ってのは確か雛見沢村を纏めてきた『御三家』の内の一つつす」

「ちなみに後の二つは『古手』と『公由』ですね」

「ふむ…」

美鶴先輩が思考の海に沈む。

「ね、ねえ、さっき『心配要らない』ってどうして言えるのよ」

「そうだけ、幾らお前の親があそこの出身つっても」

ゆかりと順平が詰め寄ってくるが、俺は平然と言い返す。

「簡単だ。あそこで起きた災害は人工的に起こされた可能性が有るからさ」

「「は？」」

「だ・か・ら、祟りなんかじゃなくて誰かの謀略による可能性が有るんだよ」

「ほ、本当なの前原君」

俺は頷くと、持っていた手帳を皆に見せる。

「俺の両親が遺した、『雛見沢村大災害』の考察を記したものだ」

そこには、あの災害に関する様々な情報が書かれていた。

あの村で起きた『連続殺人事件』の事。

あの村の生き残りから聞き出した事。

あの事件による裏の世界の動きの事。

そして何より、あの村から離れて初めて見えたおかしな点について
「父さんたちは『何かの陰謀があったんじゃないか』って思っ
て思っただけだ」

「けどよ、これじゃ何の証拠にもなんねえだろ」

「ああ。証拠は無いし、俺の両親も死んでいるしな」

「他に調査を行っていた方はいらっしやらないのですか？」

アイギスの一言に、あの人達を思い出しながら答える。

「四年前まで調べていた人達がいたけど、もういないんだ」

「それってどういう事だよ」

「中心になって調べていたのは『赤坂さん』と『大石さん』の二人
だけど、『大石さん』は七年前に老衰で亡くなっている」

「ではもう一人の方は」

「……『赤坂さん』は、四年前に村を調査中に行方不明に……」

「そんな……」

皆が絶句した時、風花が叫びだす。

「……！鏡の力が高まってきています！みんな気をつけて！」

その言葉の直後、鏡から光が迸った。

「一体何が、全員無事か？」

「こっちは大丈夫だ」

「俺っちも無事っす」

「私も平気です。海斗は？」

「……………」

「あれ？リーダー？」

どことも知れない暗い回廊の先で、見慣れた青い扉くぐる。
そこは見慣れているはずのベルベットルームだった。

「ようこそ、ベルベツトルームへ。お呼びだてして申し訳ありません」

「今回は何のようだ？」

「実は今回お呼びしたのは私どもではございません。そちらの女性
がなさった事でございます」

振り向くと、長い黒髪の巫女のような女性が居た。

「はじめまして、圭一と魅音の息子さん」

「……前原海斗です」

「そうだったわね海斗さん。いきなりだけど、あなたには決めてもらわなければいけない事があるの」

女性の手が撫でるように払われると、闇から滲み出すように二つの扉が現れる。

「ひとつは元居た場所へ戻るための扉。もうひとつは惨劇の舞台へと続く扉」

「惨劇？」

「そう、運命に囚われ、永久とわに訪れない夏へ至ろうとする少女が踊る惨劇の舞台」

この時、俺の頭には何故か写真でしか見たことの無い少女の顔が浮かんだ。

「時間が無いの。あなたには悪いけど急いで決めてほしい」

女性の顔に焦りが見えていた。

「なら、こっちにしよう」

「よろしいのですか？」

エリザベスが聞いてくるが、俺に言わせれば当然の答えだ。

「多分父さんがここに居ても同じ事を言うだろうな。『運命？惨劇

？そんなものぶち壊してやるぜ！』って」

そう、俺の覚えている父さんなら絶対にそう言うだろう。

扉をくぐる時、女性の言葉が聞こえた。

「ありがとう。そして梨花と母をまよろこく」

第三話 希望の欠片

私は扉を開いたはずだった。

仲間たちと力を束ね、策を重ね、全ての人事を尽くして未来を勝ち取ったはずだった。

「なのに……、どうして……」

昭和五十八年五月十九日、私はかつての悪夢の中で目を覚ました。

私が目を覚ますと、あたりは夕暮れに近かった。

目をこすりながら半ば反射的に日めくりを見て、私は凍りついた。

「羽入、居るんでしょ？すぐに出来てきて！」

すると押入れの中から、幽体状態の羽入が出てくる。

「……ん〜、どうしたのですか梨花？」

「寝ぼけている場合じゃないわよ！今日はいつ？昭和何年の何月何日？」

「決まっているのです。今日は昭和五十八年の……」

羽入の顔色が青く変わってゆく。

「あうあうあう、おかしいのです！何で今日が五月なのです？」

「知らないわよ！鷹野や山狗をとっ捕まえて」

「……梨花あ〜、ただいまですわ〜」

「……おかえりなので沙都子。（羽入、続きは外でするわよ）沙都子、僕はちよっとお外へ行ってくるのです」

「晩御飯はどうなさいますの？」

「みい、それまでには帰るので用意しておいて欲しいのです」

「わかりましたわ。遅くならないでくださいませよ？」

「じゃあ行ってくるのです」

そう言っ私は、見えない羽入と共に外へと飛び出した。

私たちは祭具殿の裏手で、あの記憶のことを話し合った。

「やっぱり、あの記憶は夢じゃないのね」

「当たり前なのです。ボクだって一緒に頑張ったのです。なのにどうして……」

「ごめん羽入。疑ったわけじゃないの。でもどうして……」
私たちは首をひねる。

前の世界の記憶は、八月の半ば頃で途切れている。

あの時点で、私たちには最早力は残っていなかったはずだ。

そう、一日たりとも戻せないほどに。

「結局、私たちは牢獄から抜け出せないのね……。何度抜け出してもそこは牢獄の中……」

「梨花……」

「うつつ……うあああ……」

いつしか、私は泣いていた。

私が死んだのなら、あの世界の雛見沢は滅んでいるかもしれない。

私たちと共に戦った仲間たち諸共に。

「梨花あ……」

羽入の情けない声に、私は正気に返る。

「ごめんなさい羽入。そうよね、私たちはまだ生きている。たとえわずかな時間しか無くても、あきらめない限りそれは敗北じゃない」
そう、諦めず戦うことだけが、私たちの最大の武器なのだから。

そろそろ帰ろうとした時、あたりの空気が変わった。

「な、何？何なの？」

「あうあうあう？」

辺りを見回していると、何かが砕けるような音と、人のうめき声が聞こえてきた。

「これは…、祭具殿の中？羽入、ちょっと見てきて」

「分かったのです。……梨花、中に人が倒れているのです！」
「何ですって?!」

訳が分からなかったが、とりあえず中に入ることにした。

「危険です梨花!」

「そんなの関係ないわ。……っ」と

鍵を開け、中に入ると、一人の少年が起きた所だった。

「誰?」

少年と私の声が重なる。

あれ?あの顔誰かに似ているような…?

「えーと、ここは僕のおうちが管理している場所なのです。何処から入ってきたのですか?」

「ああ、ごめん。すぐに……!」

私の顔を見て、少年の顔に困惑が走る。

「……えーと、君の名前って……」

「僕ですか?僕は古手梨花なのです」

すると、少年の顔に今度は驚愕が走った。

「貴方は誰なのですか?」

少年は、悩みながらも自分の名前を言った。

「…俺は海斗。前原海斗」

第三話 希望の欠片（後書き）

原作ひぐらしの舞台が昭和五十八年＝西暦1983年で、この時圭一は十四歳。

ペルソナ3の舞台のラストが西暦2010年で、この時の圭一の年齢は四十歳。

この年なら高校生の息子が居てもおかしくないですよ？
この拙作はこんな妄想から生まれたのです。

第四話 トキウツシノカガミ

（梨花）

一体彼は何者だろう？

私はこのイレギュラーに対する困惑を隠しながら聞いてみる。

「……前原？圭一の親戚ですか？」

「け、圭一って……、あ、あの、今日は何年の何月何日かわかるかな？」

何だか時渡り跡の私のようにだ。

「みい、今日は昭和五十八年の五月十九日なのですよ」

「昭和…五十八年……」

「ところで僕はまだ聞いてないのです。あなたは圭一の……」

「あうあうあう！た、大変なのです！」

うるさい、羽入。

「鏡が割れかけているのです！」

「（ちよつと羽入、邪魔しな……）」

「えつと、鏡ってこれの事？」

「そうなのです！そのかが……」

あれ？

「……えくと、ボクの事が見えてますか？聞こえてますか？」

「あ、ああ。見えてるし、聞こえてるよ」

あれ？あれ？

「ちよつと聞きたいのですが、何が見えてますか？」

「変な巫女服着てあうあう言ってる角付きの女の子」

「やつぱり！どういうことよ羽入！あんた他の人には見えないはずでしょ?!」

「ボ、ボクにもわからないのです！今まで梨花以外に姿を見れた人なんていなかったのです！」

「あ、あの……」

（海斗）

目の前の少女達に声をかけるが、相変わらず騒いでいる。どうやら俺の声は聞こえていないようだ。

しかし、見れば見るほどあの写真の少女にしか見えないな。

けど、もし本当に彼女が『古手梨花』なら、俺は過去に時間移動したことになる。

「そういえば……」

さっき『羽入』さんが言っていた鏡を見る。

少し罅が入っているが、確かに分寮で見た鏡と同じものだ。

「ちよ、ちよつといいかな？」

さっきよりも大きく彼女達に声をかける。

「この鏡について聞いてみたいんだけど」

「え？鏡？」

「この鏡がどうかしたのですか？」

「たぶん、俺がここに居るのはこれのせいだと思っただが……」

正直、自身はないが。

「私は知らないけど、羽入は？」

「それはボクが作ったものなのです。『トキウツシノカガミ』というのです」

「『トキウツシノカガミ』？」

「そうですね！この鏡は『過去』や『未来』を覗き見ることができるものなのです！」

「ちよつと羽入！それ初耳よ？」

「実はボクも忘れていたのです。そもそもこの鏡にはもう力は残っていませんから」

ひゅるりら

何故だろう？室内なのに風が吹いた気がした：

（梨花）

忘れていたですって？

こんな大事なことを？

あまりの事に目が眩みそうになったが、視界の端に少年の姿が映った所で気を取り直す。

そういえばまだ彼の素性を聞いていなかった。

「そういえばあなたは何者？」

「いきなり口調が変わったな」

「茶化さないで！何者か聞いているでしょう?!」

「ああ、ごめん。俺もちよつと混乱していた」

「で？」

「…信じられないかもしれないが、俺はこの時代の人間じゃない。未来から来たんだ」

は？何を言っているの？

「これを見てほしい」

そういつて彼は一冊の生徒手帳を差し出した。

「月光館学院…、二年生…、平成、二十一年度?!」

「『平成』なんて年号は聞いたことがないのですよ？」

「ああ、ちなみに西暦で言えば2009年になる」

…なら、彼は二十六年後の人間ということに…

「ちよつとまつて、あなたさつき『前原』海斗って名乗ったわよね？ひよつとして、」

「ああ、俺の父さんは『前原圭一』だ」

外伝一 真実を追う者たち（前書き）

外伝です。

相変わらず登場人物の人数が少ないです。

外伝一 真実を追う者たち

（雛見沢村大災害前日）

「だいじょうぶか魅音」

「うん…、ごめんね迷惑かけちゃって」

「気にするなよ。それにしても…、くそっ！」

今日の明け方、梨花ちゃんの死体が古手神社で見つかった。

俺は死体を見ていなかったが、かなりひどい状態だったらしい。

警察は捜査のために村中を駆けずり回っていた。

俺たちは事情調査のため夕方に興宮警察署に呼び出された。

魅音も、詩音も、レナも、沙都子も、完全にぼろぼろだったが、何とか知っていることをすべて話すことができた。

だが、途中一人の刑事が落とした写真を見て魅音は気を失ってしまった。

「そういえば、レナたちはどうしたの？それに今何時？」

「ん？ああ、レナたちは先に帰った。時間はそろそろ一時かな？」

「え?!」

「さつき大石さんが遅いから警察署（こ）の仮眠室に泊まっていけてさ」

「そっか」

…沈黙が、重い。

「どうして、こうなっちゃったんだろ…」

魅音が呟く。

「昨日まであんなに楽しく過ごさせていたのに、みんなずっと一緒だつて思っていたのに…」

「魅音…」

魅音の目から、光が消えてゆく。

「梨花ちゃん、ひどい姿だった…」

え？

「おなかきられてて、なかみひっぱりだされてて、それで…」

「魅音！」

見ていられなかった俺は、肩をつかんで揺さぶる。

「圭ちゃん……」

「もう寝ろよ」

俺は、何も励ますことができなかった。

翌日、俺は騒ぎで目を覚ました。

隣では魅音が寝ていたため、こっそり抜け出してあたりを伺う。しばらくして、ロビーで大石さんを捕まえた。

「一体どうしたんですか大石さん」

「ああ前原さん、いいですか、落ち着いて聞いてください」

大石さんは余裕のない声で、それを告げた。

「先ほど、雛見沢村で火山性ガスが噴出したとの情報が入りました。もうすぐここも避難誘導が始まります」

「「え?!」」

振り向くと、そこには魅音がいた。

魅音は、大石さんの胸倉をつかんで詰問する。

「火山性ガスってどういうこと?! 村は、みんなはどうなったの?!」

「……わかりません、情報が錯綜して正確なことが分からないんです」

「何か分かることはないんですか?!」

「……ひとつだけ、住民の生存は絶望的とだけ……」

住民の生存は絶望的

魅音はその一言で崩れ落ちた。

俺はそんな魅音を抱きしめながら、運命に宣戦布告した。

あれから六年が過ぎた。

俺は今、難見沢村大災害について調べている。

あの後、俺は親戚をたらいまわしされた。

高校を卒業した後、進学せずに親戚の家を出て小説家になり、できる限りの時間を調査に当てたのだ。

魅音とは、あれから会っていない。

魅音は興宮の母親に引き取られ、俺は親戚に引き取られたからだ。

いや、本当は会ったのが怖かったのかもしれない。

俺は魅音を慰めることができなかったから。

そんなことを考えながら、俺は今日も図書館で当時の資料を漁っていた。

資料をめくりながら気付いた事を手帳に書き込んでいると、ふと影が差した。

顔を上げると、そこには

「お久しぶり、圭ちゃん」

「魅、音？」

「そつだよ、圭ちゃん」

魅音が、居た。

「それにしても久しぶりだな」

「そつだね」

俺たちはカフェで久しぶりの再開を喜んでいた。

「…で、吉田が…」

「あはは、圭ちゃんらしい〜」

一通り学生時代のバカ話をしていただけ、不意に魅音が今の事を聞いてきた。

「そういえば圭ちゃん、今は何やってんの？」

「今か？今は小説家として頑張ってるよ」

「へえ〜、伊達に『口先の魔術師』だっただけ…、あ」

「『口先の魔術師』か…」

口先の魔術師。

あの村で俺につけられた大事な思い出。

もう二度と聞くことはないと思っていた二つ名。

「ごめん、圭ちゃん」

「……『部長』相手に怒るわけねえだろ、な」

「うん……」

雰囲気、重苦しくなる。

「そういえば、さつき図書館で調べ物してたよね。あれってもしかして」

「ああ。雛見沢のことだ」

「……ねえ、圭ちゃん。私も一緒に調べてもいいかな？」

「魅音も？別にいいけど、親御さんはどうすんだよ？」

「…父さんも母さんももういないから」

聞くと、母親の茜さんはあの後村を調べに行ってから行方不明になつたらしい。

父親の組長さんは組を解散した後、心労で倒れ、半年前に亡くなつたそうだ。

(ちなみに葛西さんはあの当時、詩音の護衛として村に居たため亡くなっている)

「すまん…」

「ん、もう気にしてないからいいよ」

「そうか。そういや今魅音はどこに住んでいるんだ？」

「家はないよ。あちこちぶらぶらしてるから」

「なら、うちに来るか？部屋ならまだあるから」

「え?!」

「あ、いや別にそういつつもりじゃ」

……

「……あ、あはははは」

そんな感じで、俺と魅音の共同生活は始まったのだった。

あれからまた何年かが過ぎた。

魅音とは…、まあ、その、夫婦になった。

若い男と女が一緒に暮らしていたから、必然みたいなものだ。

「どうだ、魁斗は」

「ん、もうすっかり寝てる」

魁斗、いや海斗は俺たちの間にできた息子だ。

この子が居るから、俺たちは前に進めているようなものだ。

「それにしても、だいぶはかどつてきたな」

「そうだね、やっぱりあれはどう考えてもおかしいからね」

大災害の調査はかなりの進歩があった。

魅音のおかげで村の生き残りの人たちと接触できるようになった。

別口で調査していた大石さんと赤坂さんに会うこともできた。

「入江機関か…」

「確かに今思えば、あの村にあの規模の診療所は普通ありえないよね」

「けど、こんなことに監督が関わっているなんてな…」

「そうだね…」

この情報はさつき、赤坂さんから聞いたものだったが、正直信じられなかった。

「けど、これで多分もう少しでみんなの仇が取れるかもしれないね」

「ああ…」

もう少し、もう少しであの悲劇の真相にたどり着くかもしれない。

日付の変わりそうな時計を見ながら、俺はそう考えた。

外伝一 真実を追う者たち（後書き）

海斗は圭一と魅音の息子であり、同時に園崎本家の最後の一人でもあります。

従って、彼の名前にも『鬼』が含まれて居ます。

ですが、そのまま魁斗では目立つので、圭一の発案により普段は『海斗』通している、という設定です。

以上、どうでもいいような裏話でした。

第五話 反撃の狼煙（前書き）

最近少し忙しかったので、少々遅くなりました。

第五話 反撃の狼煙

（梨花）

「…それで、お連れしたのでございますのね」

「みい、困った人を放っておけないのですよ」

あれからいろいろ聞くこと思ったが、沙都子が捜しに来た為、私は海斗を道に迷った旅行者としてうちに招待した。

「まあいいですわ」

「ありがとうございます。え」と

「北条沙都子ですわ」

「俺はま、あ、いや、前田海斗だ。海斗と呼んでくれ」

「海斗さんですね。狭いところですのでどくつろいで下さいまし」

「沙都子、お皿を取ってほしいのですよ」

「わかりましたわ」

深夜、沙都子が寝静まったのを見計らった私たちは、私たちの家である防災倉庫の一階に集まった。

「それで、あなたの事をもう少し詳しく聞きたいのだけれど」

「ああ、何でも聞いてくれ」

「あなたは自分が圭一の息子だと名乗ったわ。その証拠はあるの？」

「…証拠になるかどうかはわからないが、父さんの残した手帳がある。これだ」

そう言つて、海斗は古びた手帳を差し出してきた。

「これは…、確かに圭一の字ね」

「色々調べてあるのです。！梨花、さっきの所！」

「これね。つて、この写真は！」

羽入が見つけたのは何の変哲も無い新聞記事の写真だった。名前も聞いたことの無い名前だった。

だが、その写真の人物は…

「鷹野……」

私たちを牢獄に閉じ込めたはずの鷹野だった。

「……鷹野は切り捨てられてこんな事に？」

（海斗）

梨花ちゃんの手帳のページを見たまま、思考の海に沈んでいた。彼女については、わからない事が多すぎる。

一体彼女は……

「少しお話してもいいですか？」

いつの間にか羽入ちゃんが隣に来ていた。

「あ、ああ。どうしたの？」

「圭一たちの事を聞きたいのです。あなた圭一の事を過去形で話しているのは、ひよつとして……」

「……ああ。俺の両親はもう死んでいるんだ。十年ほどまえに」

「やはりそうですか……」

ふと、おぼろげな両親の顔が脳裏に浮かぶ。

「俺の両親は『雛見沢大災害』についていろいろ調べていた。あの災害のせいで全てを失ったからな」

「両親ということは、海斗の母親は」

「前原魅音、旧姓は『園崎』だ」

「そうですか……」

「話を戻そう。俺の両親はあの災害は『天災』ではなく『人災』あるいは『虐殺』だと考えていた」

そしてあの手帳に書かれている事実を語った。

災害直後に発見された死体の中に、一部普段着の者が居た事。

近くの高濃度ガスが流れ込んだ沢で、生存者が見つかった事。（数

カ月後には死んでいる）

災害前に死んだはずの『鷹野三四』そっくりの人物が、数年後交通事故で死んでいる事。

途中、我に帰った梨花ちゃんにも同じ事を説明した。

「んで、『鷹野三四』は何らかの組織に所属し、その命令で雛見沢を滅ぼした。そして彼女は口封じもしくは他の理由で組織に粛清された。これが俺の両親が考えた仮説だ」

「やっぱりすごいわね圭一達は。それだけの情報でここまで核心に近付くなんて」

「で、では圭一達の事故はもしかして……」

（梨花）

「で、では圭一達の事故はもしかして……」

「そうだ、圭一達は調査の途中で事故死しているのだ。もしかして『東京』の奴らに……」

「……あれは本当に事故だよ。俺もその場に居たから言える」

「そう……」

彼の顔がわずかに歪む。

「それはそうと、俺も聞きたい事がある。梨花ちゃんは父さん達から聞いていたのと違うけど。それに羽入ちゃんは何者なんだ？」

「そうね……」

全て話した。

羽入の事も。

百年の旅路の事も。

一つ前の世界の戦いの事も。

「……そして気付いたら、また繰り返していたのよ」
「なるほど……」

「結局、全ては無駄だったのよ。あの戦いも、何もかも全て……」

私は絶望し、俯き、涙をこぼれる。

不意に、頭を撫でられた。

顔を上げると、海斗の笑顔が見えた。

「大丈夫、今度は上手くいくさ」

ああ、やっぱり彼は圭一の息子だ。だって、

「これからは、俺も手伝うよ」

こんなにも安心できる笑顔は、

「だから、頑張ろう」

圭一ゆずりだから。

第五話 反撃の狼煙（後書き）

これからも不定期更新が続くと思います。
せめて一週間に一回以上更新できるようにしたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4683t/>

ひぐらし異聞録 ～螺旋の絆～

2011年7月14日09時32分発行